

著書で学生にベクトルを!

小澤雄樹

朝倉幸子◎TH-1

illustration:Taco



■ 構造への目覚め

京都大学を卒業したと聞くと、お公家顔が相まって出身地が京都かと…。が、小澤雄樹さんは1974年群馬県に生まれ、高校までは埼玉県。進学を前にやりたいことも見出せずに悩んでいた青年が、今、建築の構造界に新風を放っている。学部にも溶け込めずに建築構造分野があると知らない学生だった。4年生になってから雑誌の建築文化の特集「モダンストラクチャの冒険」(NO.603, 彰国社)を開いた瞬間、「構造ってかっていい!」と目覚めたのだった。芝浦工業大学建築学部教授となつて、若いエンジニアの卵たちを引っ張っている小澤さんだ。

成績がよくなかったからという理由で地震防災のゼミへ進む。その流れで、大規模集客施設空間の安全性の研究で知られている東京大学生産技術研究所の川口健一教授(本コラム36号に登場)の研究室へと進んだ。川口研究室を振り返り「研究に対する姿勢が厳しく怒られてばかりでした。先生には今でも頭が上がりません」と。

■ 設計と構造をつなぐ役割

大学院卒業後に構造家の今川憲英さん(本コラム81号に登場)の構造設計事務所TIS&PARTNERSに入社して4年間の修行。「なぜアトリエ事務所に?」と覇志堂が投げかけると、数ある構造家の中でも自

分とはまったく違うタイプの師の近くで勉強がしたかったからと。今でもそのパワフルな設計姿勢を貫く今川さんを、大尊敬する小澤さんだ。その後、縁があって立命館大学に専任講師として赴任。5年間の任期中は京大時代の恩師の下で伝統木造の知識を身につけた。同時に厳しい川口教授のところへ再度通い、3年半で博士論文を完成させた。この間、小澤さんは「自分の武器は何だろう? 自分の役割とは何?」と思考を重ねる。またもや悩める人になって、やっと自分には実務と大学を結びつける役目があるのではないかと思ひ始めた。立命館大学退所後は橋本一郎さんとパートナーシップを組んで、エスキューブ・アソシエイツを設立して数年間は実務をしながら復帰の道を探った。そして2011年に、芝浦工業大学に准教授として迎えられたのです。

■ 「20世紀を築いた構造家たち」

2017年日本建築学会著作賞を受賞するという快挙。何度も編集会議にかけられてようやくゴーサインが出た『20世紀を築いた構造家たち』(2014年、オーム社)。その編集者が小澤雄樹さんをフィーリングで著者に選んだのだった。世界各地で建築の発展に重要な役割を果たした構造家16人をピックアップ。経歴や作品、時代背景と技術の相互の関係を書き上げている。その目的は、構造エンジニアを目指す学生にベクトルを与えること。意匠優先が否めない建築設計のなかで、具体的なエンジニア像があれば努力する目標も出るはずと考えた。若手構造家の小澤さんの経歴を知るにつけ、足掛け4年を費やしてこの本が書けたのは小澤さんだからだろうと、意味が見えてくるのです。出版本がきっかけで構造家の斎藤公男先生(今コラム61回に登場)との貴重な交流も始まったと喜びを明かす。

大学教員に1年間与えられるサバティカルで選んだのはドイツのドレスデン工科大学。同室の同僚の働き方に驚いたという。朝10時に来てまずティーブレイク、ランチをとって午後もゆったりとコーヒーブレイク。そして午後4時には帰る。仕事は持ち帰らず休日はきちんと休むのに仕事の滞りはまったくない。その集中力と働き方を見てきた小澤さんには教育の現場に活かすところが大いにあったのだ。構造家シリーズ第二弾が待たれます!